

【講演 6】房総の連弧文（系）土器について

大網信良

1. 本発表の視座

連弧文土器は、加曽利 E 式期の中頃に盛行する土器群で、関東地方西南部の武蔵野台地や多摩丘陵、相模原台地を分布の中心とする。関東地方西南部は、関東平野の加曽利 E 式土器、そして中部高地の曽利式土器という中期後葉を通して存続する二つの土器型式が接触する地域として知られている。当該地域では、加曽利 E 式と曽利式が同じ遺跡や遺構から伴って出土し、また両者の器形や文様が入り混じった折衷土器が多数製作されることが一般的で、連弧文土器の出現にはこうした地域的特色が大きく作用したものと考えられる。

連弧文土器は、出現から間もない加曽利 E2 式の後半期には盛行し、関東地方西南部では加曽利 E 式や曽利式を凌ぐほどの出土量に達する。しかしながら加曽利 E3 式期になると、多摩丘陵や武蔵野台地西部では文様の粗雑化とともに急速に減少傾向に転じることとなる。他方、当該期の武蔵野台地東部から関東地方東部では、加曽利 E3 式の地文磨消手法を用いた連弧文土器が多く見られることから、加曽利 E2 式から加曽利 E3 式にかけ、連弧文土器の分布域が東方へ移動した可能性が指摘されている。こうした加曽利 E3 式期における連弧文土器の様相は、従前の多摩丘陵や武蔵野台地を中心とした連弧文土器研究では資料的制約から未だ検討の余地を多く残している。そこで本発表では、連弧文土器の衰退過程を明らかにする視点から、千葉県域における連弧文（系）土器の様相を整理し、上記の検討課題へのアプローチを試みた。なお本稿での引用文献については、シンポジウム発表要旨ならびにスライドの記載を参照されたい。

2. 連弧文（系）土器の型式学的特徴

本節では、千葉県域での検討の前提として、武蔵野・多摩地域における連弧文土器の様相を、定義と基本パターン、型式要素のバリエーション、編年、各段階の時期と併行関係、各段階の特徴、分布の各項目について（大網 2016）に従い整理した。また連弧文系土器については、連弧文土器の主文様以外の型式学的特徴を有しながら主文様のみ欠落する土器群（桐生 1981）や、連弧文土器の主文様と施文域に関する基本パターンに当てはまらない土器群とした。

3. 千葉県における連弧文（系）土器の型式学的特徴

まず千葉県内で出土する連弧文（系）土器について、施文域構成別に型式学的特徴を検討した。施文域 2 帯構成の連弧文（系）土器では、主文様は弧線文・波状文、地文は撚糸文が多く、次いで縄文となる。口唇部・頸部文様には交互刺突文・円形刺突文・平行沈線文があり、胴部文様は二本沈線による懸垂文や逆 U 字状文が主体で、単沈線による長方形区画文や逆 U 字状文では地文磨消を伴う例が多い。施文域 3 帯構成の連弧文（系）土器では、型式学的特徴は 2 帯構成のものとはほぼ同一であるが、主文様は口縁部と頸部に集約され、胴部は懸垂文や区画文のみとなる傾向が指摘される。連弧文系土器では口縁部のみ主文様が施される例が多く、主文様の下位には懸垂文や区画文が付帯し、両者が連結して Y 字状の文様となる一群も確認される。また弧線文・波状文を施す浅鉢形土器も一定数確認された。

次に連弧文（系）土器と他型式との共伴事例について、千葉県内を県北部・県中央部・県南部に分け、新地平編年との対比を試みた。県北部では、松戸市や柏市を中心として、11c 期から 12b 期まで出土が確認された。県中央部では、千葉市や市原市を中心として、12 期を中心とするものの、やはり県北部と同様の時間幅での出土が確認された。しかし木更津市や南房総市を中心とする県南部では、連弧文土器 1 段階に相当する新地平編年 11b 期から出土が見られ、11c 期には一定数が確認される一方で、12 期以降は事例が減少する傾向が看取された。このように、千葉県内では連弧文（系）土器の出土傾向に一定の地域差が確認された。

4. まとめ

検討の結果、房総における連弧文（系）土器は、関東地方西南部と型式学的特徴に共通性が高く、量的にも連弧文土器の主体分布域の一つとして認識しうることを指摘した。時期的には連弧文土器 1～2 段階から型式情報の伝播・定着が確認され、連弧文土器 3 段階に主体的な分布を示すようになり、地文に撚糸文や縄文が多い傾向は武蔵野台地東部の土器様相との類似性が看取された。

また、「千葉型連弧文土器」（戸田 2010）を含む、地文磨消手法を用いた連弧文土器が多く分布することから、連弧文土器は 3 段階において東京湾岸に分布の中心を移し、当地で土器群に一定の斉一性が生じていることを指摘した。連弧文土器は、1 段階（出現期）が関東山地東縁部、2 段階（盛行期）が関東地方西南部の台地・丘陵というように、分布の中心が時期ごとに変遷している可能性が想定され、今回の検討により 3 段階（衰退期）にはさらに東方への移動が追認された。またそれとともに、連弧文土器の消滅過程を考察する際に東京湾岸地域の土器群に着目する必要性を確認した。

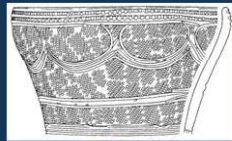
地文磨消を伴う連弧文土器は、千葉県にとどまらず、関東北部や東北地方南部にまで波及することが知られている。こうした現象は、本シンポジウムで検討された曽利系土器との共通性が指摘される。一方、関東地方より西方の地域では、上記の連弧文土器と加曽利 E3 式土器が少なくとも東海地域まで分布することが確認されている（大網 2015）。こうした東京湾岸地域から発する土器情報の広域伝播現象について、今後詳細な検討を重ねていきたい。

令和6年度加曽利貝塚E地点・B地点発掘100周年シンポジウム

『加曽利E式土器の再検討』

2024年11月23・24日 於・千葉市生涯学習センター

房総の連弧文（系）土器について



加曽利貝塚

多摩ニュータウンNo.72遺跡
(東京都八王子市)



東京都埋蔵文化財センター

大網 信良

1. 本発表の視座

連弧文土器の概要と特徴

◆連弧文土器の特徴：

「頸部と体部に弧線を主とした沈線がある」土器（山内1940）
加曽利E式とは「別の型式に属する」土器群

◆連弧文土器の分布：

主に関東地方西南部（武蔵野台地・多摩丘陵・相模原台地）
関東一円・東北地方南部・甲信地域・東海地域まで波及



『日本先史土器図譜』掲載の標本89-2
(旧板橋区中新井)（山内1940）

加曽利E式土器の細分・表記の対応 ※大内2008をもとに小林2019を加え作成

加曽利貝塚 総括報告書	勝坂・ 阿玉台末 ／加曽利EⅠ初	EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
ローマ数字 (岡本ほか1965)		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
アラビア数字 (山内1969)		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
埼玉編年 (谷井ほか1982)		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
新地平編年 (黒尾ほか1995)		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
実年代幅 (小林2019)		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ
		EⅠ					EⅡ					EⅢ	EⅣ

連弧文土器の盛衰

◆1970年代以降に本格化する連弧文土器研究

◆永瀬史人氏による一連の編年研究

1段階（出現期）

2段階（盛行期）→他型式と拮抗

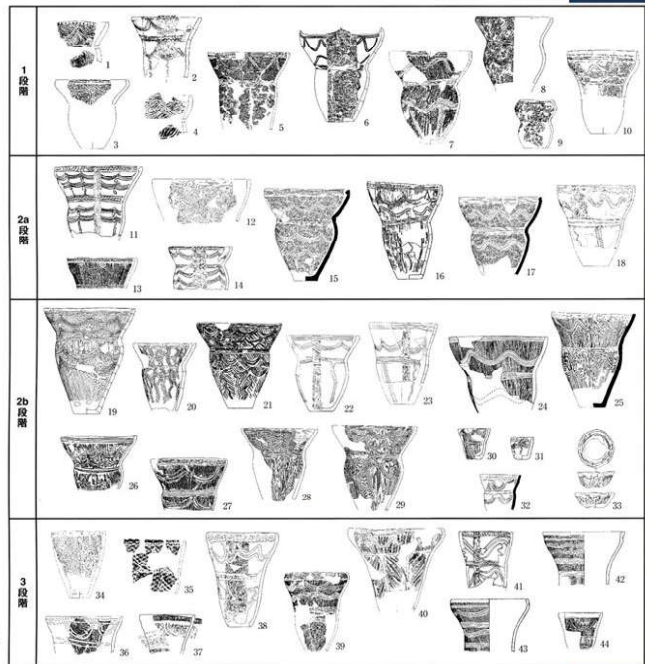
3段階（衰退期）

◆連弧文土器は短命な土器群

加曽利E2b～E3b式期併行（黒尾1995）

実年代で150～200年（小林2019）

連弧文土器の変遷
（永瀬2008）



連弧文土器はどのように消滅していくのか？

◆関東地方西南部での連弧文土器研究は出現期～盛行期がメイン

衰退期は資料が少なく、大まかな検討にとどまる

◆戸田哲也氏による「千葉型連弧文土器」の指摘：波状の磨消連弧文土器の定型化と広がり

→分布エリアが東方へ移動？

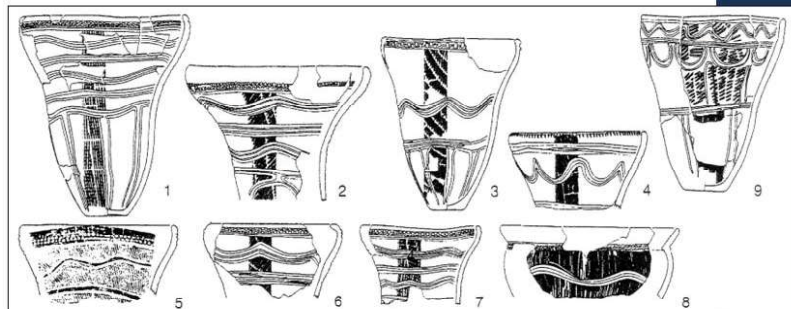
◆連弧文土器の消滅過程とは？

◆房総の出土資料から検討を

深める必要性アリ

↑

本発表の目的

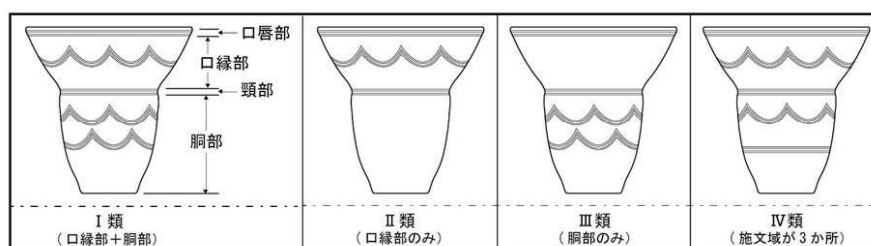


千葉市有吉北貝塚出土の「千葉型連弧文土器」（戸田2010）

2. 連弧文（系）土器の型式学的特徴

連弧文土器の定義と基本パターン

- ①口唇部・口縁部・頸部・胴部の四つの施文域で構成される。
- ②主文様の連弧文・波状文が、口縁部・胴部施文域の両方あるいは一方に施文される。
- ③隆帯を用いず、全ての文様が沈線や刺突により施される。



連弧文土器の基本パターン

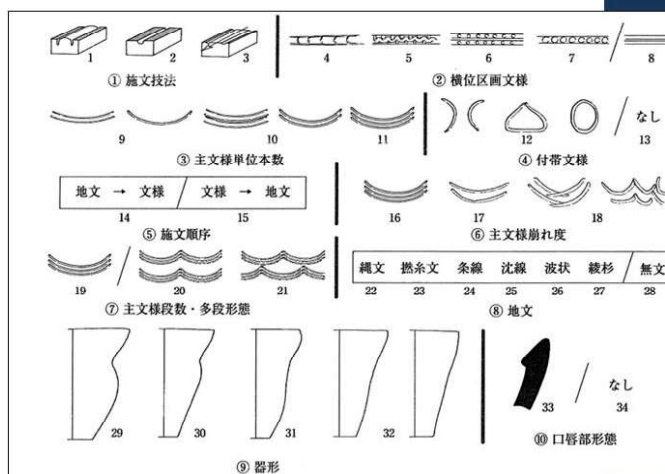
型式要素のバリエーション

◆主文様は連弧文・波状文

- ・沈線の本数
- ・沈線間の地文磨消の有無

◆連弧文土器を特徴づける他の要素

- ・地文：縄文・撚糸文・条線文など
- ・口唇部・頸部文様：
 - 平行沈線文・交互刺突文など
- ・区画文と懸垂文



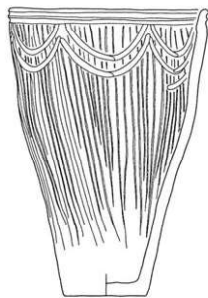
連弧文土器の型式要素のバリエーション（永瀬2008）

連弧文系土器の定義

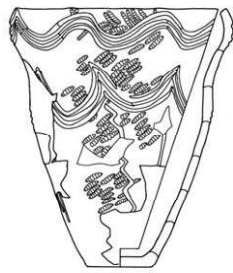
①「基本パターン」から逸脱する土器群

②主文様が欠落する土器群

「形式・文様帯区画・施文手法などが連弧文土器と共通するが、連弧文を表出しないで、地文だけのものや、縦位の波状文を有するもの、杵状のモチーフを有するもの等」（桐生1981）



町田市忠生遺跡



世田谷区明治薬科大遺跡



稲城市多摩ニュータウンNo.9遺跡

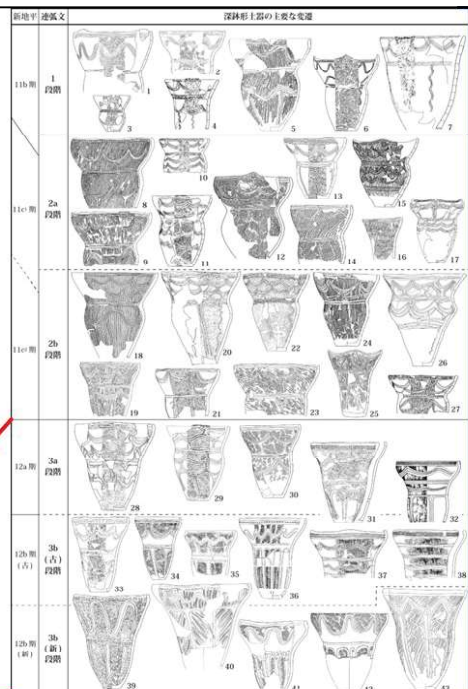
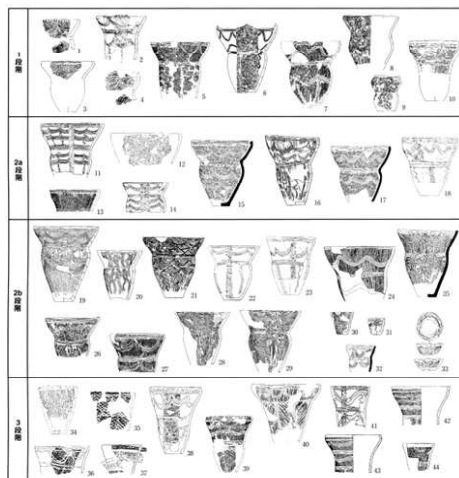


町田市忠生遺跡

連弧文土器の編年（大網2016）

◆多摩・武蔵野地域の連弧文土器を3大別4細分

→1～2b段階は準拠、3段階を細分



大網⑤

連弧文土器各段階の時期と併行関係

- ◆1期：新地平11b期・加曽利E2b式・曾利Ⅱa式
- ◆2a期：11b～11c1期・加曽利E2b～c1式・曾利Ⅱb式
2b期：11c2期・加曽利E2c2式・曾利Ⅲa式
- ◆3a期：12a期・加曽利E3a式・曾利Ⅲb式
3b(古)期：12b期前半・加曽利E3b式前半・曾利Ⅳa式？
3b(新)期：12b期後半・加曽利E3b式後半・曾利Ⅳb式？

加曽利E式			曾利式		
黒尾 (1995)	新地平 (2004)	大網 (2016)	今福 (2005)	櫛原 (2014)	百瀬 (2003)
					I a 古
1a	10a		I 古	I a	I a 新
1b	10b		I 新	I b	I b
1c	10c				
2a	11a	連1	Ⅱ古	Ⅱa	Ⅱa
2b	11b				
2c 古	11c1	連2a	Ⅱ新	Ⅱb	Ⅱb
2c 新	11c2	連2b			
3a	12a	連3a	Ⅲ	Ⅲa	Ⅲa
				Ⅲb	
3b	12b	連3b 古 連3b 新	Ⅳ古 Ⅳ新	Ⅳa Ⅳb	Ⅲb Ⅲc
3c	12c		V古 V新 V末	Va Vb Vc	Ⅳa Ⅳb 古 Ⅳb 新
	13a 13b				

出土多
 存続期間

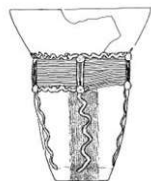
連弧文 唐草文

編年対照表（大網2013改変）

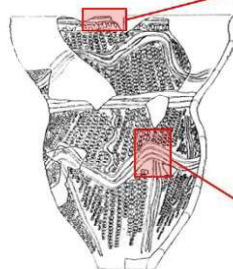
連弧文土器の各段階の特徴（大網2016）

◆1段階

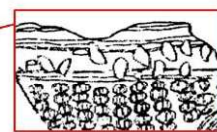
- ・器形：口縁が内湾、胴部が張り出す
- ・施文手法：半截竹管腹面手法
- ・地文：縄文・撚糸文
- ・口唇部・頸部区画文
：押引文・交互刺突文・平行沈線文
- ・併行関係
：新地平11b期、櫛原曾利Ⅱa式期



町田市TNTNo.939遺跡15号住（下層～中層）



武蔵村山市吉祥山遺跡28号住下層



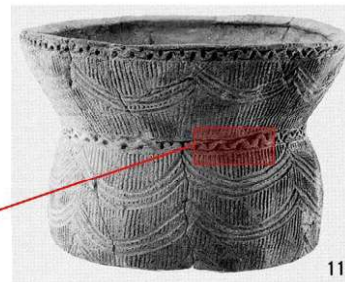
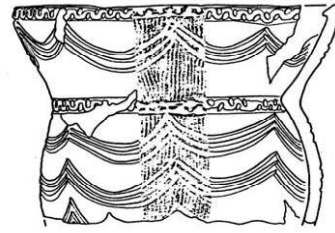
交互刺突文



半截竹管腹面

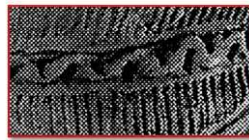
◆2a段階

- ・器形：口縁が内湾、胴部が張り出す
- ・施文手法：棒状工具、半截竹管背面
- ・地文：縄文・撚糸文・条線文
- ・口唇部・頸部区画文
：（押引文・）交互刺突文・平行沈線文
- ・その他の特徴
：主文様の多段化、断面三角形の口唇
- ・併行関係
：新地平11b～11c1期、櫛原曾利Ⅱb式期



112

八王子市TNTNo.300遺跡26号住

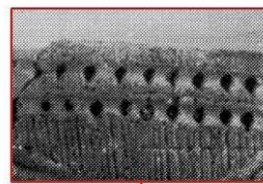


蛇行文様の交互刺突文

◆2b段階

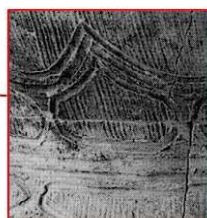
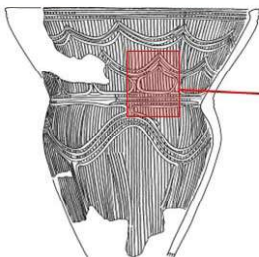
- ・器形：口縁が外反、胴部の張り出しは弱まる
- ・施文手法：棒状工具、半截竹管背面
- ・地文：条線文（・縄文・撚糸文）
- ・口唇部・頸部区画文
：交互刺突文・平行沈線文・円形刺突文
- ・その他の特徴
：区画文の隆盛
- ・併行関係
：新地平11c1～11c2期、櫛原曾利Ⅲ式期

円形刺突文



399

西東京市下野谷遺跡W41B号住

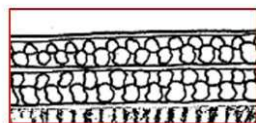


「栗形区画文」

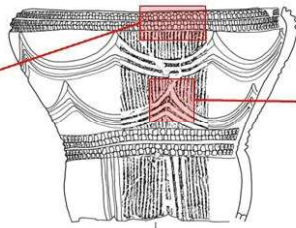
多摩市/稲城市TNTNo.520遺跡9号住

◆3a段階

- ・器形：口縁が内湾、頸部のくびれが弱まる
- ・施文手法：棒状工具、半截竹管背面
- ・地文：（条線文・）**縄文・撚糸文**
- ・口唇部・頸部区画文
：（交互刺突文・）平行沈線文・円形刺突文
- ・その他の特徴
：**地文磨消手法の導入**
- ・併行関係
：新地平12a期、櫛原曾利Ⅲ式期



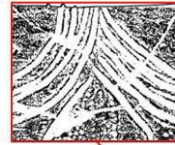
円形の交互刺突文



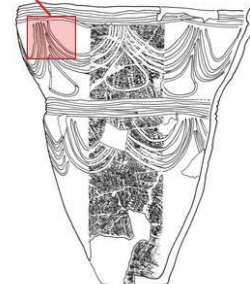
町田市忠生遺跡A地区106号住



沈線間の地文磨消



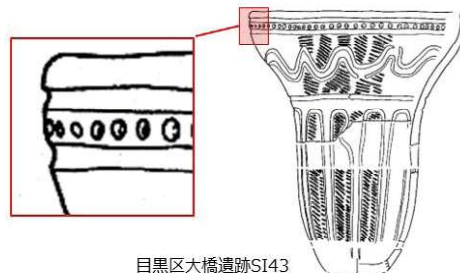
施文の粗雑化



町田市忠生遺跡A地区106号住

◆3b（古）段階（施文域2帯構成）

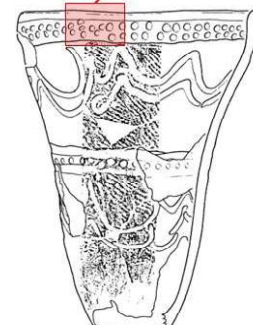
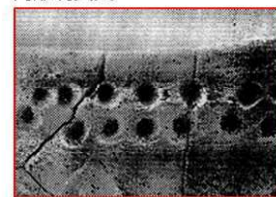
- ・器形：口縁がやや内湾、頸部のくびれはほぼ消失
- ・施文手法：**幅広の棒状工具**
- ・地文：縄文・撚糸文
- ・口唇部・頸部区画文
：平行沈線文・**沈線間の円形刺突文**・円形刺突文
- ・その他の特徴
：**主文様はうねりの小さな波状文**、磨消有無あり
胴部は横「コ」字状文・逆「U」字状文
- ・併行関係
：新地平12b期（古）、櫛原曾利Ⅳ式期



沈線間の円形刺突文

目黒区大橋遺跡SI43

円形刺突文



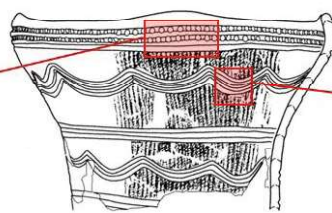
八王子市TNTNo.300遺跡15号住

◆3b（古）段階（施文域3帯構成以上）

- ・器形：口縁が内湾、頸部でややくびれる
- ・施文手法：棒状工具
- ・地文：縄文・撚糸文
- ・口唇部・頸部区画文
：平行沈線文・沈線+円形刺突文（・沈線+交互刺突文）
- ・その他の特徴
：主文様はうねりの小さな弧線文・波状文
施文・調整は精緻
- ・併行関係
：新地平12b期（古）、櫛原曾利IV式期



沈線+円形交互刺突文



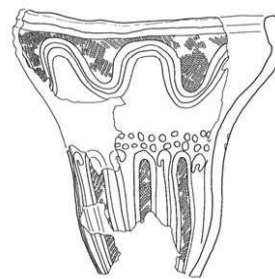
世田谷区桜木遺跡220号住



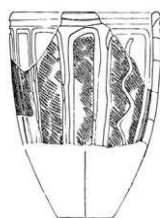
沈線間は地文磨消

◆3b（新）段階

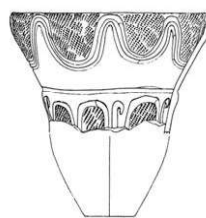
- ・器形：口縁が内湾、頸部でややくびれる
- ・施文手法：棒状工具
- ・地文：縄文・撚糸文
- ・口唇部・頸部区画文
：円形刺突文・平行沈線
- ・その他の特徴
：主文様はうねりの大きな波状文
胴部に厥手状懸垂文
3帯構成の連弧文土器が消滅
- ・併行関係
：新地平12b期（新）、櫛原曾利IV式期



武蔵台東遺跡J60号住



和田・百草遺跡1号土坑



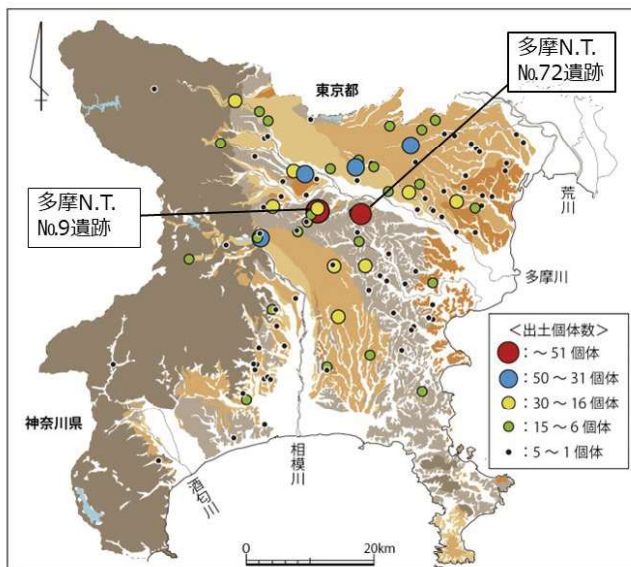
下野谷遺跡W231号土坑

連弧文土器の分布（東京都・神奈川県）

◆分布の中心地域

- ・武蔵野台地
- ・多摩丘陵→量的に最も多い
- ・相模原台地

連弧文土器の量的分布



3. 千葉県における連弧文（系）土器の様相

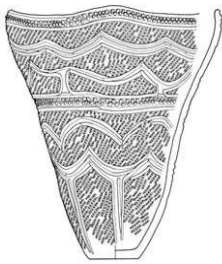
（1）施文域構成からみた連弧文（系）土器の型式学的特徴



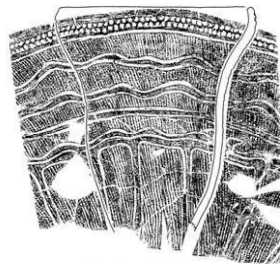
（1）施文域構成からみた連弧文（系）土器の型式学的特徴

◆施文域2帯構成の連弧文（系）土器

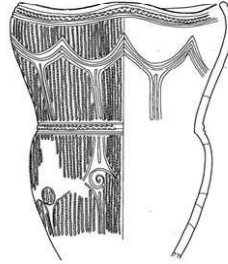
- ・主文様：弧線文・波状文
- ・地文：縄文→撚糸文（→条線文）
- ・口唇部・頸部文様：交互刺突文・円形刺突文・平行沈線文



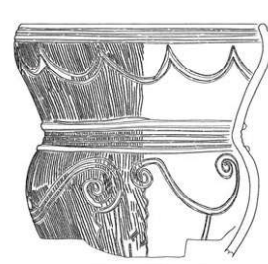
市原市草刈遺跡



柏市小山台遺跡



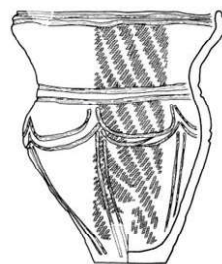
千葉市荒屋敷貝塚



南房総市深名瀬畠遺跡

◆施文域2帯構成の連弧文（系）土器

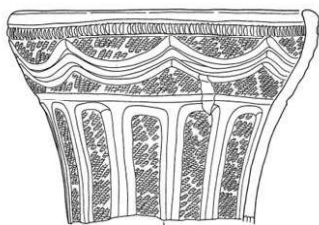
- ・胴部懸垂文：
二本沈線による懸垂文・逆U字状文
単沈線による長方形区画文・逆U字状文



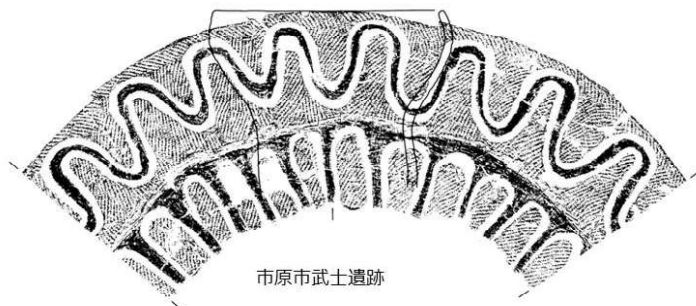
松戸市子和清水貝塚



市原市草刈遺跡



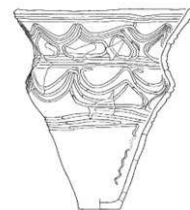
東金市養安寺遺跡



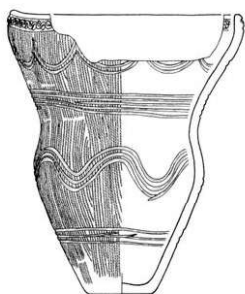
市原市武士遺跡

◆施文域3帯構成の連弧文（系）土器

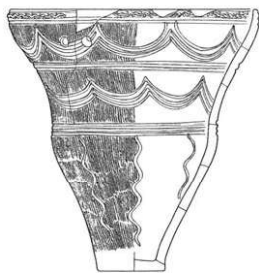
- ・口縁部・頸部・胴部の3帯と仮称→施文域分割位置は不定
- ・主文様：弧線文・波状文
- ・地文：撚糸文→縄文・条線文



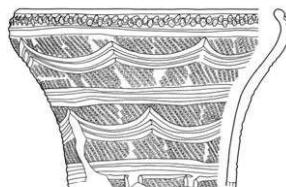
東京都府中市武蔵台東遺跡J72号住



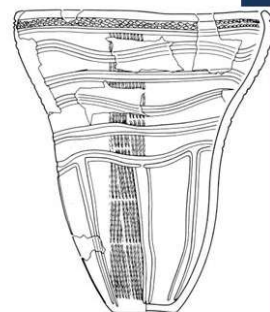
松戸市子和清水貝塚



南房総市深名瀬畠遺跡



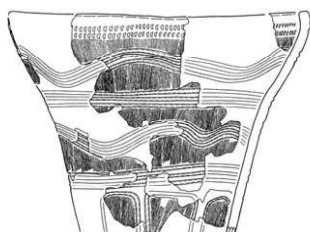
市原市中潤ヶ広遺跡



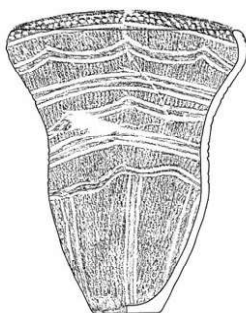
千葉市有吉北貝塚

◆施文域3帯構成の連弧文（系）土器

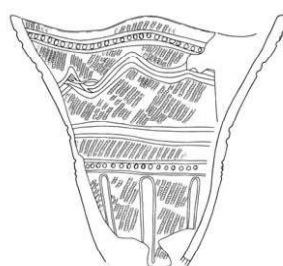
- ・口唇部・頸部文様：爪形文・交互刺突文・円形刺突文・平行沈線文
- ・胴部は懸垂文の施文事例が大半



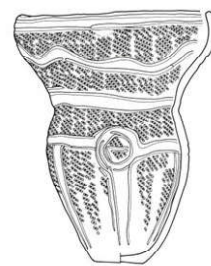
木更津市台木A遺跡



印旛郡酒々井町飯積原山遺跡



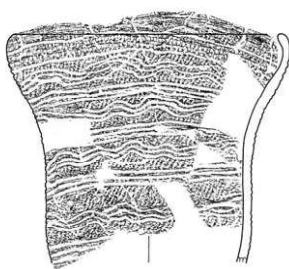
千葉市芳賀輪遺跡



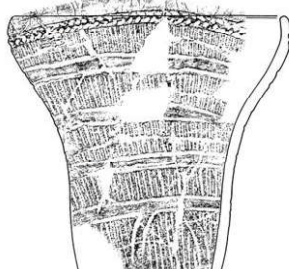
市原市草刈遺跡

◆施文域多段構成の連弧文（系）土器

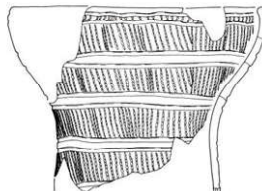
- ・3帯より多い施文域分割となるもの
- ・2本1単位で地文を磨消した横位平行沈線が巡る
→低平化した波状文との弁別、主文様との弁別に課題



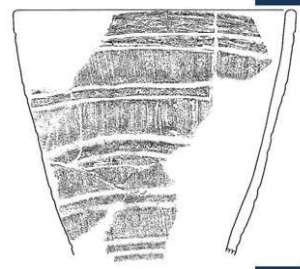
印旛郡酒々井町飯積原山遺跡



印旛郡酒々井町飯積原山遺跡



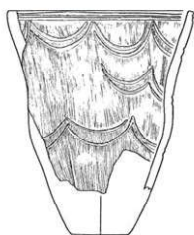
山武郡横芝光町東長山野遺跡



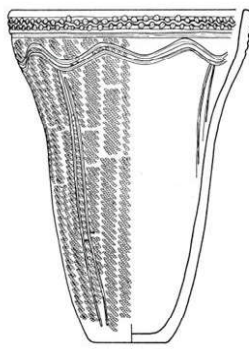
君津市三直目塚

◆連弧文系土器

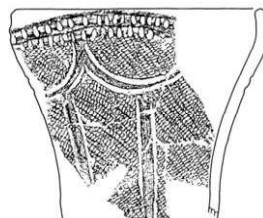
- ・主文様を多段にするもの
- ・弧線/波状+懸垂文がセット
- ・次第に区画文として変容（長山2010）



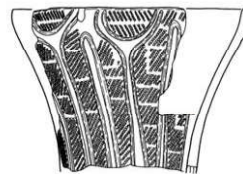
南房総市深名瀬島遺跡



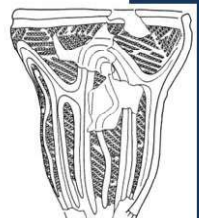
松戸市子和清水貝塚



柏市小山台遺跡



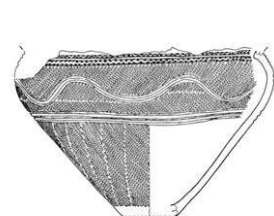
木更津市台木A遺跡



東金市
羽戸遺跡

◆深鉢形土器以外の連弧文（系）土器

- ・破片資料も含めて浅鉢形土器は一定数存在
- ・地文は縄文、主文様は波状文が多い



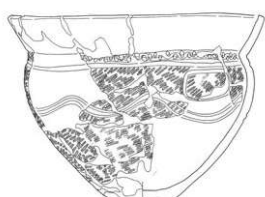
松戸市子和清水貝塚



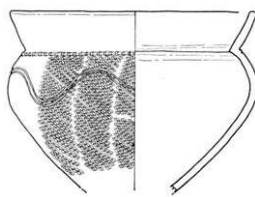
千葉市有古南貝塚



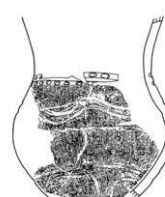
柏市出山遺跡



佐倉市吉見稲荷山遺跡

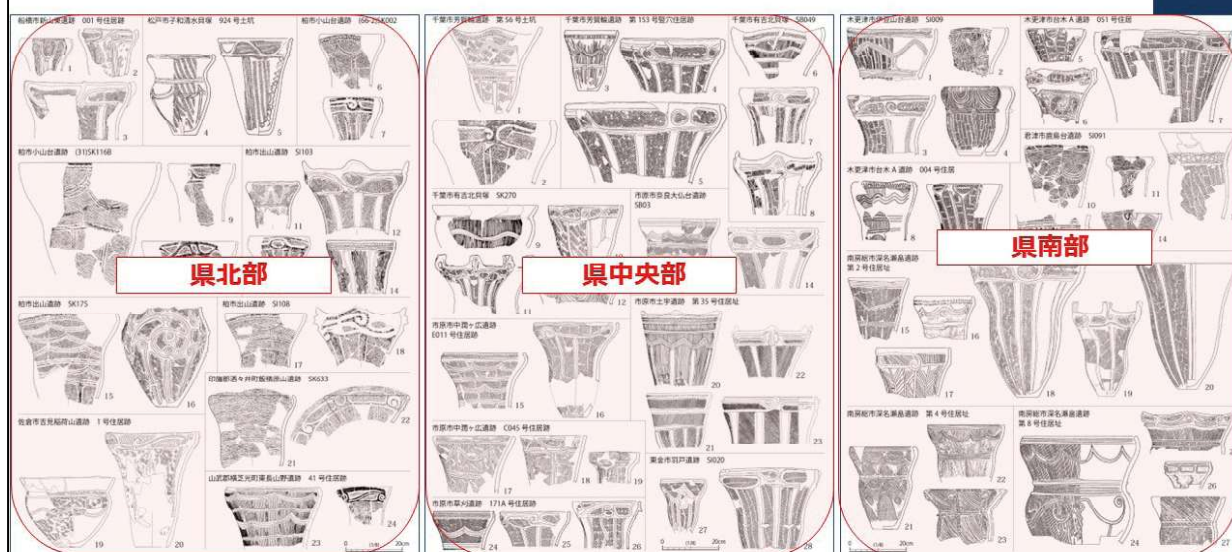


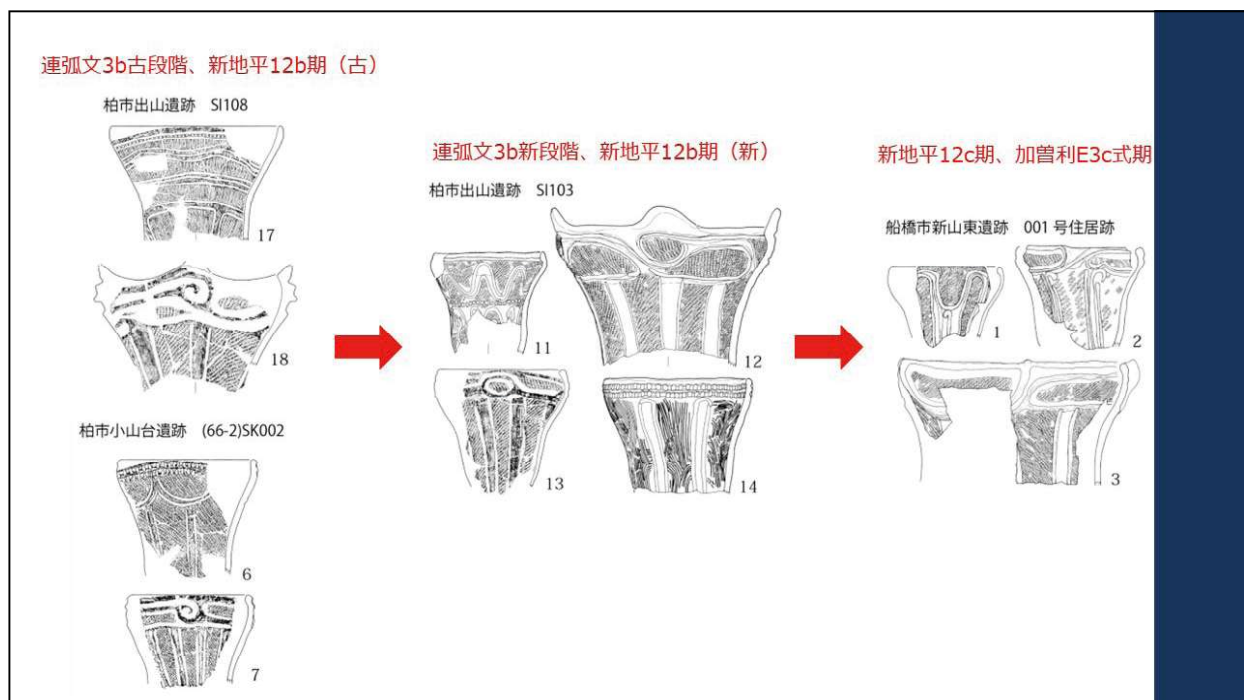
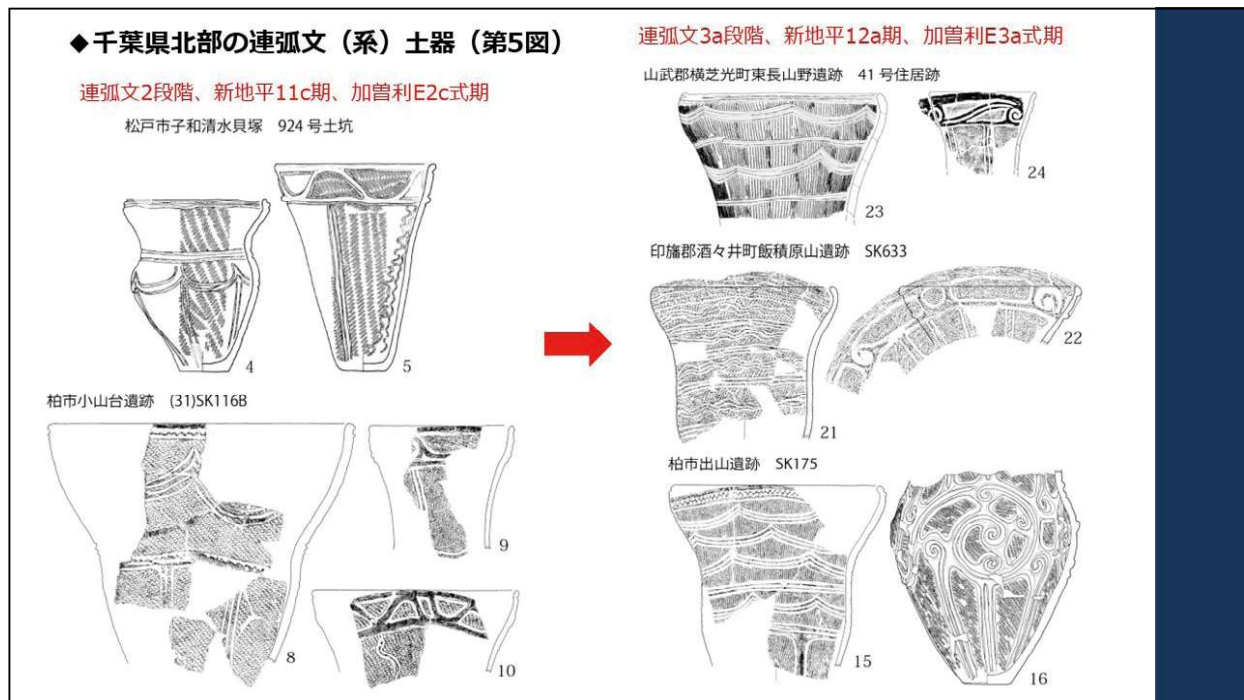
松戸市子和清水貝塚



柏市小山台遺跡

（2）連弧文（系）土器と他型式との共伴事例について



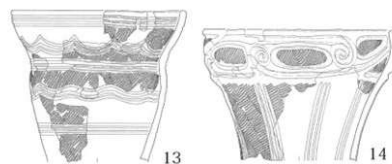


◆千葉県中央部の連弧文（系）土器（第6図）

連弧文3a段階、新地平12a期、加曽利E3a式期



市原市奈良大仏台遺跡
SB03



市原市中潤ヶ広遺跡
E011 号住居跡



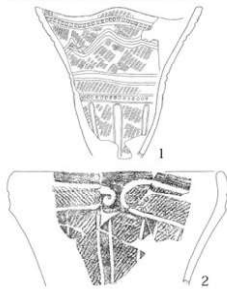
連弧文2段階、新地平11c期、加曽利E2c式期

市原市中潤ヶ広遺跡 C045 号住居跡

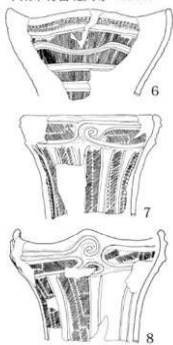


連弧文3b古段階、新地平12b期（古）

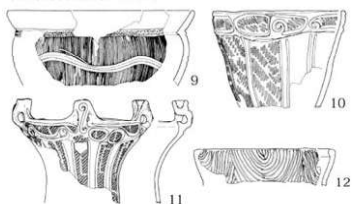
千葉市芳賀輪遺跡 第56号土坑



千葉市有吉北貝塚 SB049

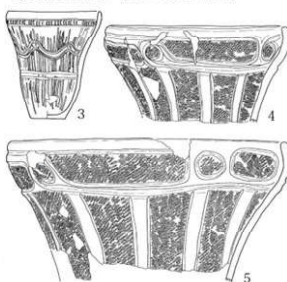


千葉市有吉北貝塚 SK270

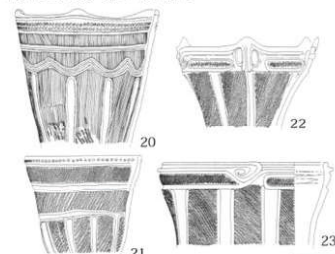


連弧文3b新段階、新地平12b期（新）

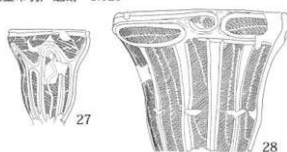
千葉市芳賀輪遺跡 第153号竪穴住居跡



市原市土宇遺跡 第35号住居址

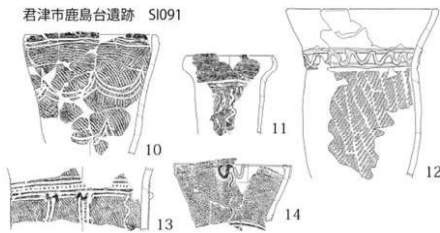


東金市羽戸遺跡 SI020

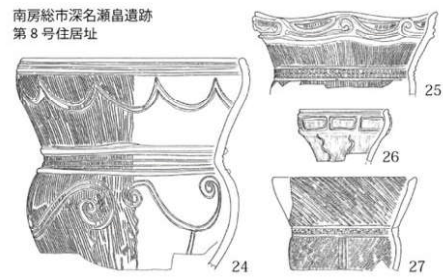


◆千葉県南部の連弧文（系）土器（第7図）

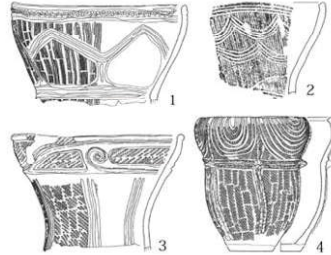
連弧文1段階、新地平11b期、曾利Ⅱa式期



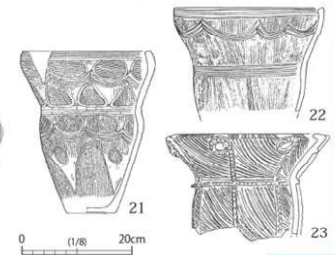
連弧文2段階、新地平11c期、加曾利E2c式期



木更津市伊豆山台遺跡 SI009

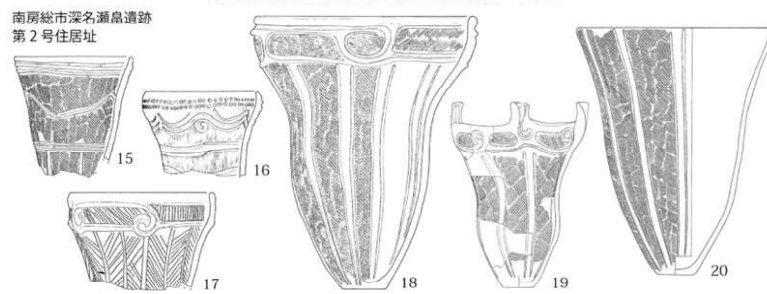


南房総市深名瀬島遺跡 第4号住居址



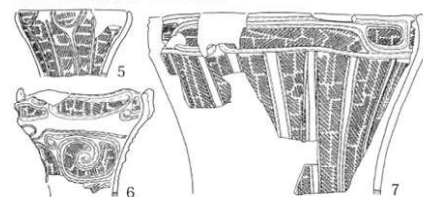
0 (1/8) 20cm

連弧文3b古段階、新地平12b期（古）

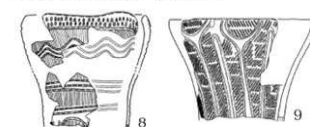


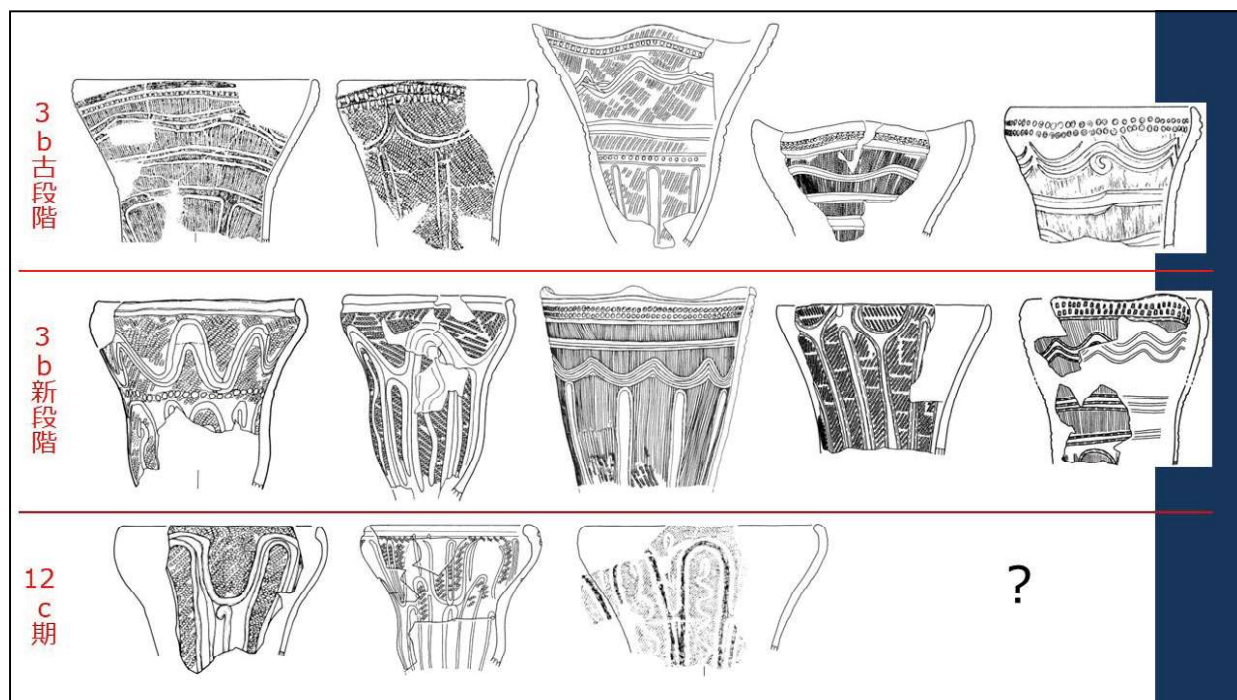
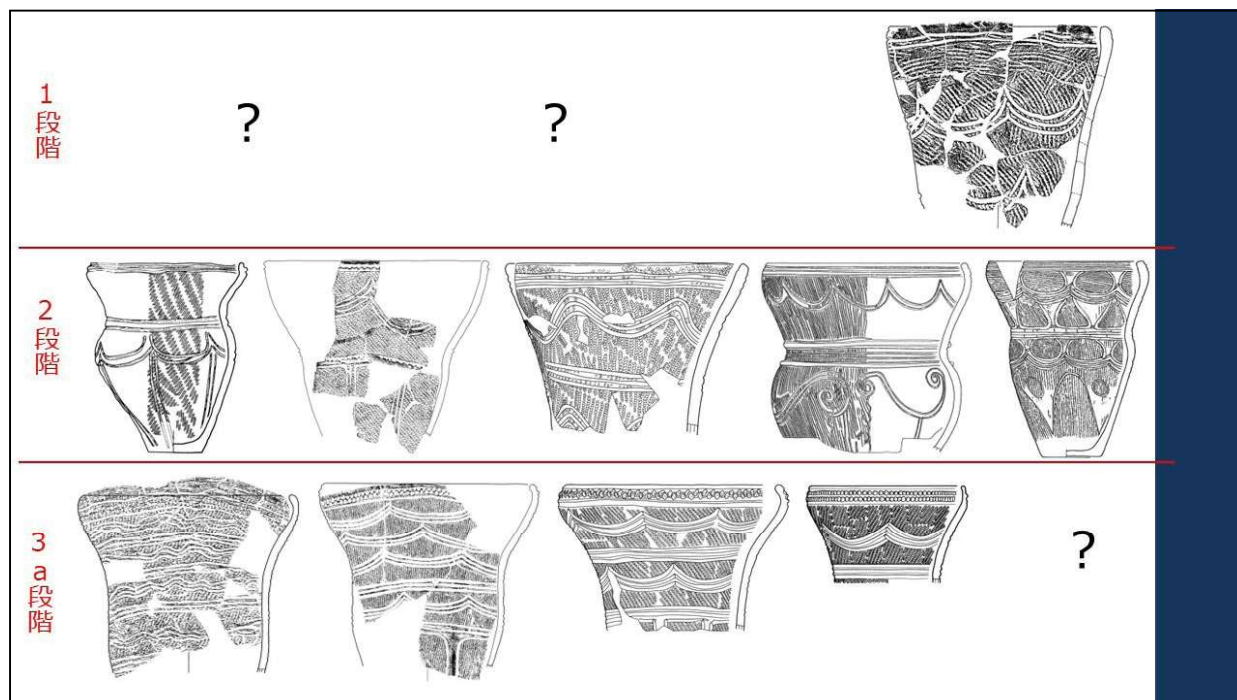
連弧文3b新段階、新地平12b期（新）

木更津市台木A遺跡 051号住居



木更津市台木A遺跡 004号住居



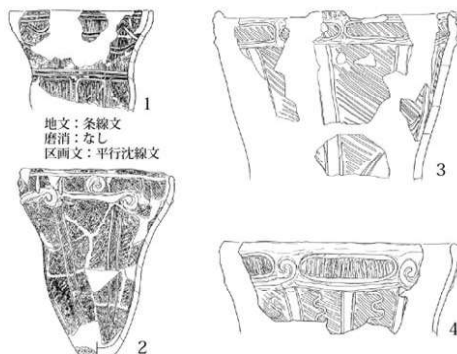


4. まとめ

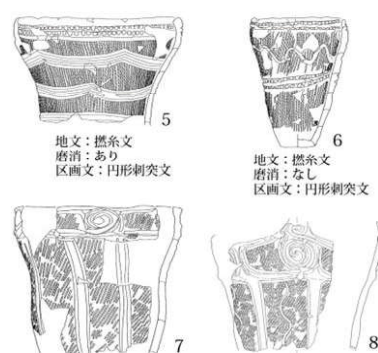
房総における連弧文（系）土器の特徴

- ◆型式学的特徴は関東地方西南部と共通性が高い。
→連弧文土器1～2段階から型式情報の伝播・定着が確認される。
- ◆地文は撚糸文・縄文が多い。
→量的に連弧文土器3段階の資料を主体とすることに起因。
(武蔵野台地東部と同様の状況)
- ◆「千葉型連弧文土器」を含む、地文磨消手法を用いた連弧文土器が多く分布。
→連弧文土器3段階は東京湾岸に分布の中心を移し、土器群に斉一性が生じる。

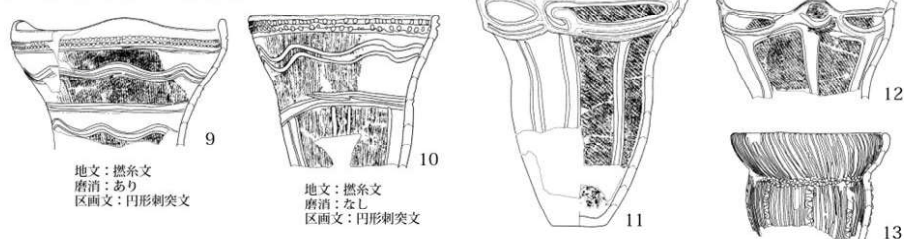
西東京市下野谷遺跡 W85 号住居跡

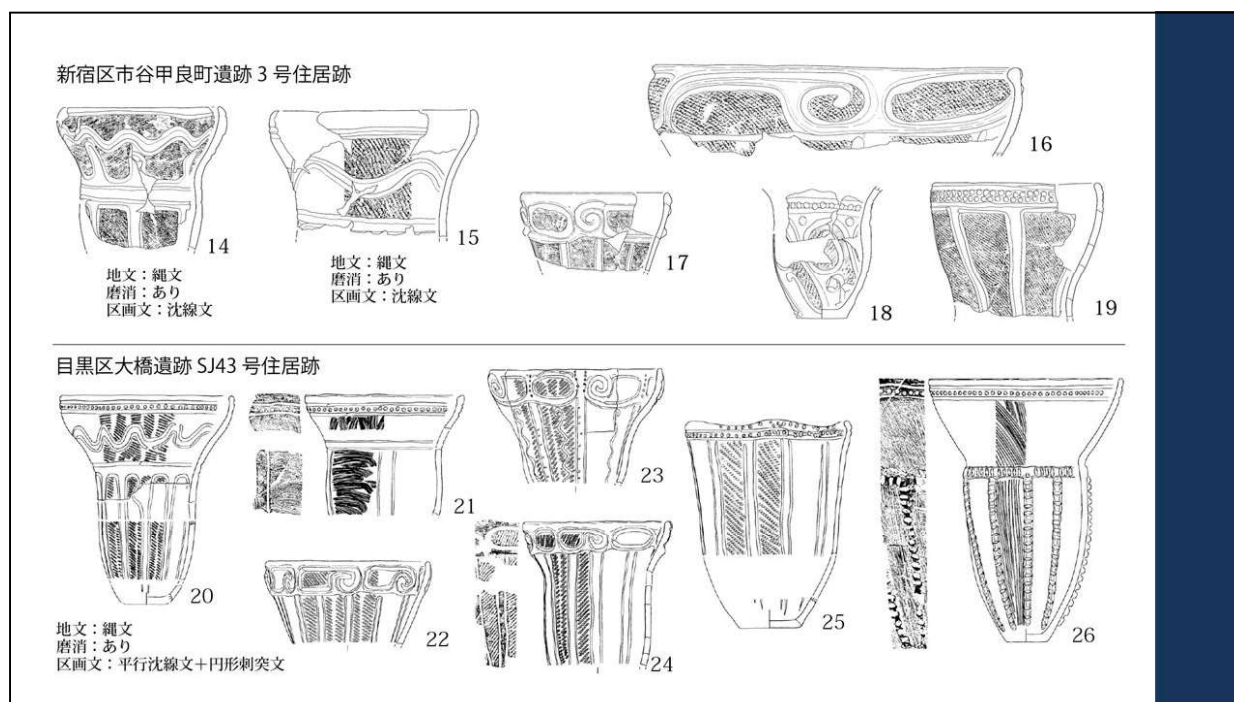


府中市武蔵台遺跡 J 地区 4 号住居跡



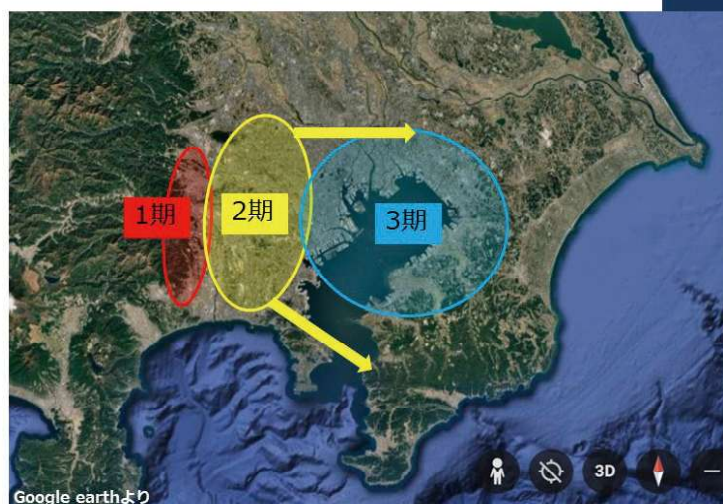
世田谷区桜木遺跡 140 号住居跡





連弧文土器の分布エリアの時間的変遷

- ◆出現期の分布は関東山地裾の
台地・丘陵部を中心に展開
- ◆盛行期の分布は関東西南部の
台地・丘陵中央部
房総南部・東葛地域にも波及
- ◆衰退期の分布は東京湾岸地域
→連弧文土器の消滅過程のヒント？

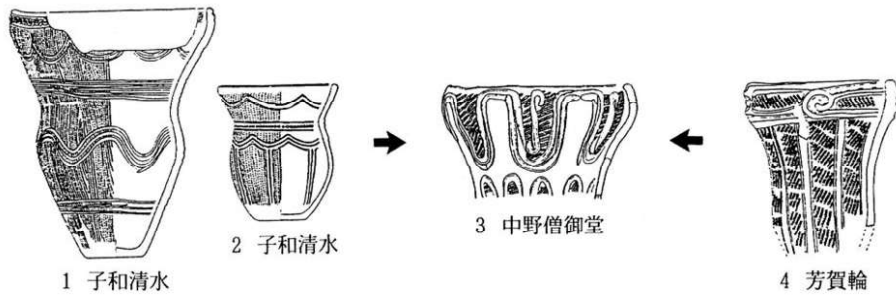


◆3b（新）段階の連弧文土器が12c期の「横位連携弧線文土器」へ変遷？

横須賀市吉井貝塚（＝東京湾岸）

→連弧文（系）土器の懸垂文の変遷過程を再検討する必要性あり。

◆連弧文土器の円形刺突文も、後続する土器群へ受け継がれる文様要素か



加納実氏による横位連携弧線文土器の系統的あり方（加納1994転載）

連弧文土器の広域伝播現象

◆3段階の連弧文土器は型式学的に一定の斉一性を維持して広域に分布

→戸田哲也氏「飛び火型現象」（戸田2006）

曾利Ⅲ式とヤットで関東南部から東部・北部・東北南部へ

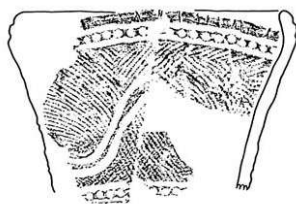
◆一方、関東以西では、3段階の連弧文土器と加曾利E3式土器が広域に分布



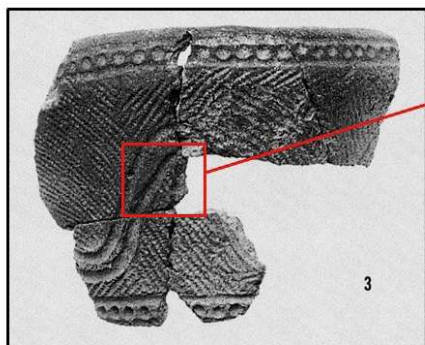
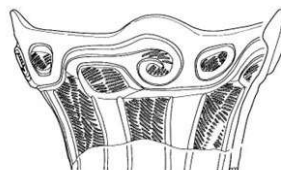
〔1 千葉県 11～2：子と清水貝塚、3～5：草刈遺跡、〔茨城県 16～8：前田村遺跡、9：南三島遺跡、〔栃木県 110：寺野東遺跡、11～13：三輪仲町遺跡、〔福島県 114～16：連船遺跡〕

関東東部・北部・東北南部で出土する3段階の連弧文土器

長野県更埴市屋代遺跡群SB5312



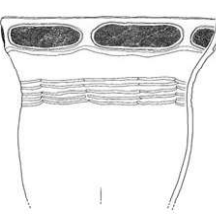
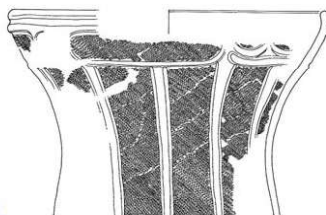
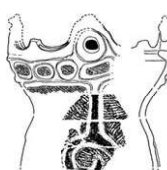
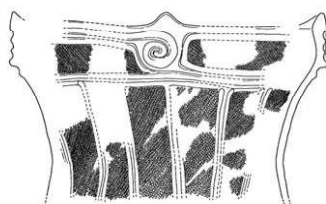
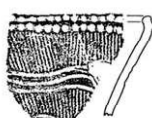
地文縄文（羽状？充填？）
円形押捺文
沈線間の地文磨消
加曽利E3b式と郷土式が共存
⇒加曽利E3b式期併行



（大網2015より）

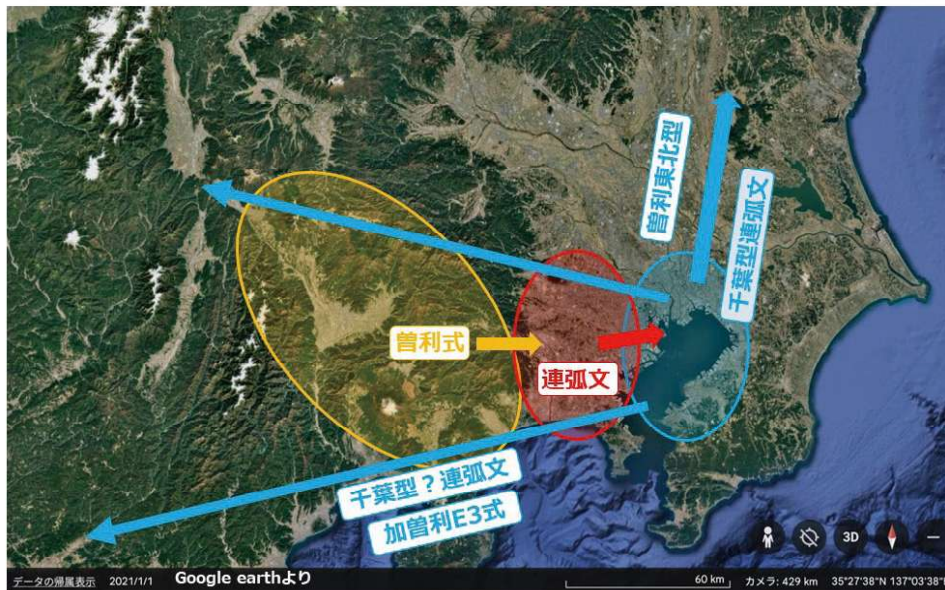
岐阜県可児市宮之脇遺跡B地点SB27

撚糸地文＋地文磨消
2列円形押捺文
厚手・調整丁寧



（大網2015より）

◆「関東地方南部」的な土器情報が他地域へ伝わる現象とは何か？



連弧文土器とはどんな土器群か？

◆同じ深鉢形土器にもかかわらず、異なった文様系統の土器群が併存する意味は何か？

→人間集団（出自）の違い？

→当時の土器製作システムにどのようにアプローチするか



(世田谷区教委2008)

◆古城泰氏の研究＝「型式」と「胎土」は一致するか？

→在地型式で非在地胎土

非在地型式で在地胎土

→複数系統の土器は同じ土で作られている。

◆分析技術が向上しても変わらない

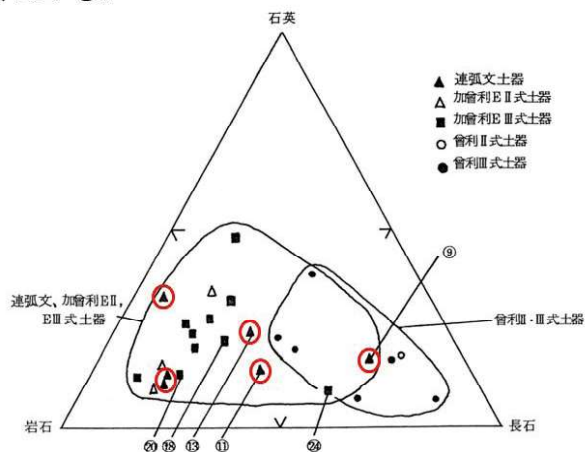
傾向（河西2008）

①各地質に属する大部分の遺跡で在地的土器が認められる。

②ほとんどの遺跡で搬入土器が認められ、搬入土器の多くは隣接地域の地質に由来する場合が多い。

③地元地質に原料産地が推定される土器が検出されない遺跡が存在する。

①・②が一般的パターン



世田谷区八幡山遺跡における中期後葉土器の胎土分析結果（古城1979）

◆連弧文土器の法量からアプローチ

→計測値にみる連弧文土器の規格性の高さ

CV 0.001：工業製品

CV 0.04：専業製作された土器

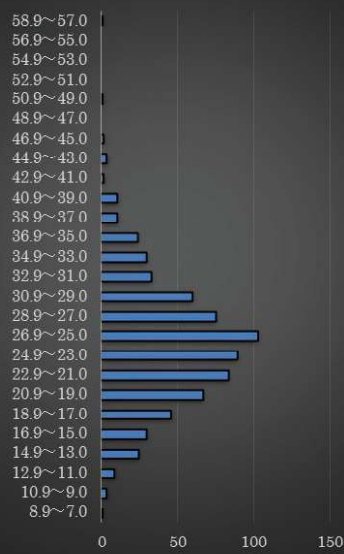
CV 0.22：細石器・プロジェクティルポイント
(Eerkens and Bettinger2001)

各測定項目の変動係数（CV）

	南関東	A地域	B地域	C地域	D地域	E地域	F地域
a：口径	0.26	0.19	0.22	0.24	0.25	0.25	0.21
b：頸部径	0.25	0.18	0.2	0.24	0.27	0.25	0.18
c：胴部最大径	0.26	0.17	0.2	0.25	0.27	0.24	
d：底部径	0.18		0.09	0.17		0.16	
e：口縁部高	0.27	0.18	0.22	0.26	0.27	0.26	0.19
f：器高	0.28		0.19	0.26		0.25	

（大網2014）

口径：南関東全体



D: 20 ℓ 以下

→そうとも言えない。



東京都・神奈川県における連弧文土器併行期の深鉢形土器容量の度数分布（大網2024）

引用文献・図版出典（予稿集掲載文献を除く）

大網信良2013「曾利式園における連弧文土器の型式変化とその背景」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第58輯第4分冊 早稲田大学大学院文学研究科

2014「縄文土器の規格性に関する一考察－中期後葉・連弧文土器を対象に－」『史観』第170冊 早稲田大学史学会

2015「連弧文土器からみた東海地域」『東海縄文研究会第5回例会「咲畑式土器とその周辺」その2』東海縄文研究会

2016「かゆい所に手が届く－遺物の基本的な見方 縄文土器編③－」『たまのよこやま』107 東京都埋蔵文化財センター

2024「土器容量からみた縄文土器の型式間関係－関東地方南西部の中期後葉土器群を対象に－」『縄文社会の探求』高橋龍三郎先生古稀記念論集刊行会

桐生直彦1981「連弧文土器の研究」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』 雄山閣

古城 泰1979「IX 縄文中期土器の製作地推定」『八幡山遺跡』 世田谷区教育委員会

小林謙一2019『縄紋時代の実年代講座』 同成社

世田谷区教育委員会2008『桜木遺跡Ⅰ』

永瀬史人2008「統計学的方法」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし』 同成社